

精神分析の基本思想についての若干の考察

札幌学院大学心理臨床センター客員研究員 安岡 譽

I. はじめに

ジクムント・フロイトが創始した精神分析は、多様な学派を生みだし、今や世界的に心理領域の専門家にとっては常識的に学ぶべき基礎知識の対象となっている。その精神分析をどう理解すべきかについては極端な賛否両論も含め多くの見解がみられる。

本稿では、「精神分析の本質とは何か」に焦点をあて、これまでの諸家の考え方を紹介しながら、著者なりの考察を2, 3つにくわえてみたい。

II. フロイト思想の「エッセンス論」

精神分析を「フロイトの思想」として位置づけ、その「エッセンス」について論じたのは小此木啓吾(2002)である。彼は次の二点をあげている。

第一は、生物としてのヒトの無力さ、である。すなわち、「生物としてのヒトの無力さ=有限性という根源的な事実の認識と受容が、フロイト思想の原点である。……この認識が、そしてこの絶対的な現実をどう受容して生きるかという発想が、常にフロイト思想の根底にある。たとえば、欲動には断念の術を、依存、愛着対象の喪失には喪失の営み、すなわち喪の仕事(モーニング・ワーク)をすすめるのがフロイトの思想である。」

第二は、「タナトス(死の本能)に対抗するエロス(生の本能)の営み」,である。すなわち、「人間の心の営みを、すべてこのヒトとしての無力さから理解するのがフロイト思想の真髄である。……すべての生は無に還る必然性を持つ。この無に還ろうとする衝動(死の本能)に逆らい、闘い、かりそめの生を営む主体がエロス(生の本能)である。……ヒトは、個体ひとりだけでは、その生を全うすることができない。……その結果、ヒト

は外界との直接の交流を営む自己保存本能の営みに加えて、母親に代表される他のヒトに対する依存、ひいては愛着を求める。……この依存・愛着は性欲動へと発展し、性と親子関係という迂路を介したエロスの営みを展開させる。それが、愛と憎しみ、エディプスコンプレックスの世界であり、母子関係から親子、ひいては家族の愛と憎しみの世界である。」

小此木は、以上の二点に要約して、フロイトが年代的に、性愛とその抑圧の葛藤の研究から、小児性欲、エディプスコンプレックス、さらに、家族、宗教、国家というエロスの営みを取り上げ、それぞれの理解と主張を行った総体を、死に対する生の営みとしてとらえる根源的認識こそ、フロイト思想のエッセンスであると主張したのである。

さて、ここでは、上記の見解を念頭におきながら、フロイトの基本思想について若干の再考を試みよう。

III. 精神分析とは何か？

1. 国際精神分析学会による定義

表1 精神分析 (Psychoanalysis) の定義

- | |
|---|
| <p>1. 精神分析とは、フロイトによって発見された人間の心を研究する方法である。</p> <p>(1) その基本仮説は、パーソナリティや性格、そして精神機能において、発達の(genetic)、力動的(dynamic)、経済的(economic)な一連の現象を展開させている無意識の過程の存在についての仮説である。</p> <p>(2) 成人の患者を理解するための基本的な方法は、自由連想法とそれに伴う行動や身体現象の観察と解明である。</p> <p>2. 精神分析とは、このような方法によって得られた経験の集大成である。</p> |
|---|

3. 精神分析とは、このような方法によって得られた経験から導き出された精神機能に関する理論である。

4. 精神分析とは、このような方法、経験および理論から導き出された成人や児童の精神障害や精神疾患を治療する技術である。

〔国際精神分析学会規約〕(小此木啓吾『現代精神分析 I』4頁, 誠信書房, 1971)
注) 仮説 (hypothesis), 理論 (theory)

上記のように、精神分析は無意識の仮説と自由連想法によって観察と事実の発見によって確かめられたものを基礎とした人間の精神(こころ、心理)の理解のため理論(仮説)と実践(治療)から成立するものである。

その人間の心を理解する過程で、仮説をもとに事実の発見とその是非の検証に努力して、必要とあらば修正、訂正を繰り返し、最終的にその正しさや有効性が認められ、共有されたものを、すなわち、仮説が証明されたものを主に基軸とした人間理解の学問的体系なのである。それは、当然にも科学的方法によって成立することが前提である。

したがって、あえて上記の精神分析の定義に、付加えるべきものがあるとすれば、「1. 精神分析とは、フロイトによって発見された人間の心を研究する科学的方法である。」と明示すべき点であろう。

その理由は、以下の論述でふれることにする。

2. 精神分析は、科学か芸術か？真実か空想か？

過去から現在に至るまで、いまだに不毛な論争が、隠然とあるいは公然と行われている。(そのことを無視してはならないし、一方、まきこまれてもならない。)それは、主に反精神分析学派の人々からの批判として出てきたものであった。

1) カール・ヤスパース(1913)は、その著書の中で、フロイトの学説を以下のように批判した。

① フロイトにおいて問題となっているのは実際は、了解心理学であって、フロイトが考えているような因果的説明ではない。

② 精神生活の一切の事、どんな出来事も、どれも了解可能(十分に意味を持って決定

されている)とするフロイトの要求が不当なことは、了解関連と因果関連とを混同したためである。……

フロイトは了解関連から全心的経過の原因に関する理論を作り上げているが、了解は本質上決して理論となれぬものであり、これに反して因果的説明は常に理論とならなければならない。

③ フロイトが多数の例で問題にしているのは、気づかれていない関連を了解し、意識内へ引き上げるのではなくて、意識外の関連を見かけ上「かの如く了解(Als-ob-Verstehen)」することである。

④ フロイトの説の一つの誤謬は、了解関連が変形して理論化していくにつれて、彼の了解の単純性が著しくなっていくことである。理論はますます単純化におもむき、了解は際限なく多種多様となる。つまり、フロイトは、心的なものは殆ど全部、いわば唯一の根本的な力として広義の性欲に了解的に帰着せしめ得ると信じている。(略)

と、指摘した。

K.ヤスパースは、人間の精神病理を哲学的視点から考察し、人間はどこまで心理的に了解することができるか、どこから先は了解不可能かということ「了解」と「説明」を徹底的に追究する「了解可能性」を論じた人物である。彼の「反ユダヤ主義」を割引くとしても、彼の議論は、日本において、精神分析批判を多くの精神科医に「正当化」させたことは事実である。

2) ハンス・J・アイゼンク(1985)は、神経症研究とパブロフの条件反射を基礎とした行動療法法の推進者として有名であるが、彼は、「精神分析は無効どころか有害である」と徹底的に批判した点が特異である。彼は、他の精神分析を批判する者の論述を多く引用するかたちで以下の諸点で批判した。

① フロイトの精神分析は、科学ではなく、皆だまされて、一時的には流行し、「フロイト帝国」を作ったが、新しい事実が発見されて、そのバケの皮がはがれ、今や、衰

退と没落にみまわれている。大変、結構なことである。

② カール・ホッパーは、「精神分析とマルクス主義と占星学は、似非科学であり、三つのうちどれにも検証可能な仮説はない」と論じている。……グルエンバウムのような現代の科学者たちは、ホッパーの基準を精神分析に適用することは不適當と指摘している。そして、フロイトの理論の論理的不適當さと事実が支持しないことの方が、精神分析は科学でなく似非科学であるときみなすのに、ずっと説得力があると提案している。……

③ 科学者にとっては、精神分析は科学というよりも、むしろ芸術のようにみえていると思う。……芸術は主観的であって、科学と違って、知識や経験を積み上げていくことができない。

④ プロイアーとの共著の「ヒステリー研究」で報告された「アンナ・O」は、「神経症」でなく、「結核性髄膜炎」であった。（その他、フロイト理論が間違っていることを、長々と述べている。）

⑤ フロイトを読む5原則として、アイゼンクの露骨な表現をすると、その本音は、訳書の帯紙にあるように、

(1) 信用できる適切な根拠なしに、フロイトや精神分析について書かれたもの、とくにフロイト自身や精神分析家を書いたものは信用するな!!

(2) 精神分析的治療が成功したというフロイトや後継者の言葉を絶対に信用するな!!

(3) 独創性があるという主張を真に受けるな、フロイトの先人たちの仕事を調べてみよ!!

(4) フロイト理論が正当だと断言する根拠を簡単に信用するな。証拠を調べると反対であることが多い!!

(5) フロイトの生活史を見るとき、コカインを常用していたといった明白なことを見落とすな!!

と、以上をみるだけで、余程、感情的なフロイト

嫌いをかかえた人物の言のようにさえ、勘ぐりたくなるが、それこそそんな証拠調べで、反論する価値はなかろう。ただ、評価すべき点があるとするれば、

(6) 神経症の「自然治癒論」と、その統計の提示、および、どのような精神療法（心理療法）をやっても、その効果の程度（その効果判定の「科学性」については疑問があるにしても）は、さして変わらない、というアイゼンクの研究結果がある。

と、いう点であろう。その彼が、精神分析を非難する根拠は、つまるところ(6)に基づいている。かりに、どの療法も変わらないというのであれば、行動療法（パブロフの条件反射学を基礎としたもの）こそ正しいとの彼の主張は、首をかしげざるを得ない「矛盾」である。

以上の「論争」が生じたのには、いくつもの要因が考えられるが、フロイト自身にも「精神分析は正統的な意味で科学ではない」、とか「精神分析は芸術のようなもので、つまり単なる解釈学にすぎない」などといった批判に対して、動揺したふしがみられるからである。アイゼンクは、フロイトは自ら、「自分は科学者ではなく、コンキスタドーレス（探検家）であると声明した」という引用をしている。（正確には、フロイトは、かつて彼の友人や崇拜者に宛てて次のように書いている。「あなた方は、しばしば私を買いかぶりすぎている。というのは、私は本当に科学者でも、観察者でも、実験者でも、また思想家でもない。私は、この種の型の人間に共通してみられる、好奇心と、大胆さと、粘り強さをもった情熱的な征服者——もし、あなた方が、この言葉を言い換えたいならば冒険家としてよい——以外の何ものでもない。このような人間は、もし成功したり、本当に何かを発見したりした場合には大切にされるが、さもなければそれが全く不当だとは言えないのである。」と述べているのであって、アイゼンクの言うように「フロイトが自ら科学者でないことを宣言した」というのは、正確でなく、悪意すら感じられる。）

フロイト自身は、最初から「科学者」であり、精神分析を「科学」とすべく努力した。その当時

の「科学」とは、主に自然科学を念頭に置き、人文科学は含まれていなかった限界があった。そこで、私たちは「科学とは何か？」について考察することが必要となる。

3) 科学とは何か？

人間には、真理愛があり、真理を知りたいという欲動がある。この自然界に生起する森羅万象の本質について探求し、研究し、解明したいのである。万物は流転し、変化し、無常である。その事象に因果関係や法則性の有無を発見、検証し、事実に基づいて証明するのが科学的学問の営為とされる。万人に認められる、客観的方法をもって探求することを科学とよぶのである。そのとき、根拠のない証明の方法をもたぬ先入見や偏見、幻想を排除されていることを条件としていることは言うまでもない。科学の本質を考える場合、フロイトとパブロフを比較することは有意義であろう。ウェルズ, H.K (1956, 1960) の著書から要約引用する。

① パブロフ (1849～1936) と フロイト (1856～1939)

心理学は、人間の精神活動とパーソナリティとを研究するものである。その目的は、人間性についての諸事実と諸法則を発見することにある。心理学は、人間が自分自身、自己を理解しようとする試みでもある。自然の最高の到達物とされる人間の精神を研究するとき、かつてフロイト学派の内観的アプローチとパブロフ派の客観的・実験的アプローチとが対峙し、それは現在までも続いている。

a) イワン・ペトロヴィッチ・パブロフ

彼は、大学で動物生理学を専攻し、時代的にはロシアの農奴制への闘い、自由主義と唯物論を哲学とする革命的な民主主義者や啓蒙思想家たち（ベリンスキー、ゲルツェン、チュルヌイシェフスキー、ピサレフなど）の強い影響を受けた。それで、自然科学への道を選んだと自伝に書いている。とくに、ロシアにおける生理学の創始者I.M.セーチェノフの『脳髓の反射』の影響を受け、「血液循環の神経調整についての研究」を動物を自然の状態において研究する方法をあみだした。

生物体の諸器官の〈相互関係〉の研究を可能にした。とくに、生物体と環境との相互関係の研究に注目した。彼は、肝臓、胃腺、脾臓のような主要な消化腺が、消化液の分泌をひき起こす神経をもつことを決定的に証明した。（この、消化に関する研究と理論とを『消化腺の研究』という標題の著書を出版し、1904年にノーベル賞をロシア人で最初に受けた科学者となった。）

その後の35年にわたる研究成果が、有名な「条件反射」であり、人間の適応機制としての無条件反射および条件反射を、実験的実証的に証明した。彼は、唯物論の立場から、高次神経活動（脳の活動）を明らかにし、分析し総合するという弁証法的手法で、科学的心理学の確立への貢献をなしたのである。

〈パブロフの学説〉

(1) 約30年間にわたる犬や霊長類の動物を使った実験的研究で、神経系とくに脳が、動物有機体と〈外的環境〉との関係を定め、それを調整すると結論した。脳は、動物の行動を生活条件に適応させる特殊な器官であり、それには二つの神経系が存在する。

1. 一定の適応反射に関するもので、進化の過程で遺伝するようになったもの、すなわち、無条件反射の機制である。（脳の皮質下に座位がある。）
2. 条件反射があり、それによって動物は、その個体が生活を送る間にもたえず変化する環境の特徴に適応することができる。（脳の大脳皮質に座位がある。）

この神経系 ——無条件反射と条件反射の機制をもつ脳と皮質—— は、動物の外的内的生活過程の全体を統制し、調整する。

(2) 晩年に、パブロフは精神疾患患者について病院でおこなった研究から、人間は動物と共通にもつ感覚信号系に加えて、言語による信号系をもっている、とした。ことは、条件刺激として、感覚信号の合図にとって代わる。こうして言語信号系は感覚信号系を基礎にして作り上げており、それと離れては存在できない。……条件刺激としてのことばは、感覚信号からの抽象化、

一般化を限りなくおこなう。ことばは、組み合わせて文法的に正しい文章をつくり、文章を組み合わせて論理的に正しい論証をすることによって、言語系は、外的実在の人間精神内への反映を可能にする。反映は、社会的実践の中で得られた感覚信号と照らし合わせて点検され、真であるか、偽であるか、実在に照応するか照応しないかが見いだされる。このようにして、言語系は外的世界の性質を真に反映する事実、法則、理論の発見を可能にする。要するに、言語系は、その基礎をなす感覚系とのきわめて密接な連関のもとに、思考、推理、目的的行動、さらには技術、芸術、科学を含む社会意識全体の根底をなす、神経機制である。人間の脳皮質は、実在からの信号を処理する感覚信号系と言語信号系の両方の座位である。

- (3) パブロフは、あらゆる種類の機能的な精神疾患に関しても理論化した。実験神経症に関する実験室での研究、精神患者に関する病院での研究から、彼は、次のように結論した。

「精神疾患の徴候群というものは、程度の差はあれ、高次神経活動に生じた障害のあらわれである。」

「神経症と精神病は、皮質および皮質下過程の、数週間、数カ月、あるいは数年も続く慢性的障害である、と定義する。」

「神経疾患のうち全般的あるいは局所的保護制止が中心的な役割をはたす数多くの形態にあっては、種々の薬を適量服用させて保護制止を高めることにより、病状は好転し、軽微になり、ある場合には治癒しうる。なかでも、誘起された深い長時間の睡眠の形をとる保護制止は、ある型の神経症や精神病に非常に有効な治療法である。」(後に「睡眠治療」とよばれた。)

b) ジクムント・フロイト

彼は、もともと生理学者・神経学者であった。1873年に、ウィーン大学に入学し、医学を選んだ。そこで、大学の生理学研究所所長のアーンスト・ブリュッケ教授のもとで勉学した。ブリュッケ教授は、闘争的な科学運動の代表者のひとりであり、その生涯を生気論(vitalism)との闘争、すなわち、

「生命力」「霊」「精(エキス)」「心霊力」そして「活力」などの神秘的な概念に反対し、無神論、唯物論の方向の考え方をとっていた。フロイトも、その支持者であった。

フロイトは、当時は、「有機体内に現実にも働く力は、一般の物理的、化学的力の他には存在しない。この力による説明が不可能な場合には、物理的・数学的方法によって、それらの作用の特定の形式を見出したり、物質に内在する化学的・物理的力と等しい威信をもつ、牽引と反発の力に還元し得る新しい力を仮定しなければならない。」と考えていた。アーネスト・ジョーンズが述べたように、「フロイトは、しばらくの間は、急進的な唯物論者となった。」のであった。

ところが、経済的生活上の問題もあり、神経病専門医の看板を掲げて開業したが、訪れる患者には器質性障害による病気が少なく、大部分が現在でいう神経症障害であった。その神経症の本質については、当時まだ誰にもわかっていなく、フロイトもどう扱ってよいか戸惑ったのであった。彼は、理論的な原理は一応、横において、何とか患者の病苦をおさえるための有効な方法を見出そうと苦心した。それで、硫酸キニーネ、テレピン油、安静、運動、温浴、冷水浴、マッサージ、色眼鏡、電気スパークなど、あれこれ試みたのである。しかし、少しも効果がなかった。

こうして2年間、あがき苦しんだフロイトは、1888年に、それまでの物質的、医薬的な療法から、きっぱりと手を切るきっかけとなった一冊の著書(ヒポリテ・ベルンハイムの『暗示と、その療法への適用』と題する催眠の本)に出会ったのである。この著者は、フロイトがフランスのシャルコーのもとに学んだが、そのシャルコーの弟子のひとりであった。フロイトは、それにしたがって患者に適用したところ、最初の数週間にして、患者を治すという奇跡に近い成功をおさめ、そのため、「フロイト博士は奇跡をおこなう医者だ」という評判が、たちまちにしてウィーンの町中に広まったのである。

(注：ジャン・マルタン・シャルコーは、19世紀の最も著名な神経学者の一人で、パリ大学医学部病理解剖学教授で、有名なサンベト

リエール神経科病院長であった。フロイトは、そのサンペトリエールで4カ月間、ヒステリー、とくに病状を伴う麻痺について研究した。この麻痺の原因について、シャルコーはフロイトに「それは〈力動的外傷 (dynamic trauma)〉による」と言われたのである。フロイトは、それを〈目に見えない〉外傷という、〈目に見えない〉ことと〈力動的外傷〉の意味を追求する課題を与えられたのであった。

その後のフロイトは、伝統的な神経学、唯物論的科学から離れ、41歳からは〈力動的外傷〉追求に専心し、それが後の精神分析を生みだして行くのである。いわゆる「精神分析の発見」である。

〈フロイトの学説〉(神経症の理論)

- (1) 無意識の理論
- (2) 抑圧の機制
- (3) 精神分析の3つの方法
 - a) 自由連想 b) 夢の解釈 c) 転移
 - (→この3つは、いずれも比喩によって「抵抗」を敷くもので、抑圧された材料を偽装された形式で意識にのぼらせる方法である。つまり、主として解釈の材料を得るための方法である。)
- (4) 精神分析の技法の2段階
 1. 無意識の材料が集められる
 2. この材料が、象徴翻訳の方法によって解釈される
- (5) 心の構造論と心的決定論
- (6) 文化・文明、民族・国家、宗教、芸術、政治・経済の領域への精神分析的知識の応用
- (7) 生の欲動と死の欲動の2大欲動論

フロイトは、精神分析が非科学的な心理学、思弁的なものであるという批判に対しては、

「脳は人間の精神の器官であり、これなしに思考も感情も存在しえないこと」を一貫と主張し続けた一方、

「脳の機能については殆ど知られていないことから、たとえ心理学が脳生理学とは全く別の学問であったとしても、これを用いる必要がある」

と考え続けていた。つまり、「大脳生理学の発展が不十分である限り、それとは別個に、心理学にも人間の心の研究に用いられる権利がある」ことを主張し続けたのである。

そのうえで、フロイトの神経症理論は、フロイトの自己分析によって、事実上形成されたのである。第1に、エディプスコンプレクス論である。第2は、幼児期の性欲の発見で、それを退行的諸相とよび、小児にみられる口愛期と肛門期の異常な傾向をさした。第3は、抵抗の学説である。そのうえで、フロイトは、退行的な幼児期性欲とエディプスコンプレクスとの〈抑圧〉が、健康と病気の鍵になる、という抑圧理論に達した。つまり、最初の「誘惑理論」を放棄し、フロイトは、両親や同胞などが幼児を誘惑したり、攻撃したりするのではなく、幼児こそいわゆる「誘惑者」であり、幼児はそうした倒錯的な性的欲動が抑圧され、それが後に一般に幻想や夢や、神経症の症状の中に現われるとしたのである。

問題は、この精神分析理論による治療の方法が、治療対象を限定していることにある。つまり、治療対象は「正常から比較的僅かにかたよっているにすぎない症例」で、「幾分かの困難と苦痛と苦勞を除けば、正常な生活を送り続けることの可能な者」であり、フロイト自身、「私の材料は、事実、かなり教養の高い階層の慢性神経症の症例から成っている」と述べているのである。

20世紀の当初、フロイトと彼の理論体系は、至るところで攻撃にさらされた。それに対して、彼は、自分の理論に対する〈反抗〉は、幼児期の問題を忘れている成人にとって、彼らの幼児期のペールをはがされることは、恥ずべきものと考えなのか、彼らを激怒させ、新しい科学として提出された(精神分析の主張)ものは奇想と曲解のかたまりに違いないというしかなかったのであり、幼児期を思い出させられることを拒絶するものである、と解釈したのであった。

② 科学の本質をどう理解するか

伝統的な科学は、方法として、実験で客観的実証ができ、かつそれがどこでも再現できなければ科学的真理として確定できないという点である。

この考えは、正しいものである。

一方、心理学が研究対象とするものは、人間の心が「主観的」な特徴をもつという部分を無視できないとすれば、主観的なものは客観的なものと「対立」することを暗黙の前提とすれば、伝統的な観点からいえば、そもそも「科学的心理学」は存在しえないものということになる。

かりに、科学が最初に述べたように、自然界のありとあらゆる現象の真理に到達し、発見できればよいという目的をもつのであればその方法は、いかなる仮説に基づいてもよいし、それによって因果関係や法則性が明らかになり、それを理論化できれば、科学と言える筈である。さらに、その理論が事実をもって証明できれば、まさに科学であったことを証明することになる。したがって、真理に到達するか否か——それにどれほどの時間を要しようとも——それが科学であったことを確定されると考えるべきであろう。真理へ到達するには、多くの迂路や修正や試行錯誤なしには達成しない、気の遠くなる過程を必要とするであろう。目先の方法論をけなしあっても生産的でなく、どのような科学的研究、科学的理論も、観察と考察を通じて真理の発見を目指しているのであるから、方法が事実を発見するのにより有効なものであるかどうかを、まさに方法的に検証することのみが最も重要な研究者の科学的態度であろう。

私の結論を言えば、時代的制約がいつの時代にも存在し続けるのであるから、精神分析は、科学でもあり芸術でもあるという現代的状況にある、というのが穏当としても、長期的に見れば科学的なものが本質に内在し、それがやがて生物学的基礎と統合され、止揚されるだろうというべきであろう。

IV. 精神分析の基本思想

自然は、生命を生み出し、その最高形態の進化とされる精神をもつ人間を生み出した。パブロフは、純粋にその過程を唯物論的に解明しようとしたし、その後継者は、いわゆる「生物学派」というかたちで現在に受け継がれている。

ただ、人間の脳を直接解明する手段、方法が進

歩しているとはいえ、さまざまな制限で、確実な歩みではあれ、遅々とせざるをえない。一方、心をあつかう科学の心理学は、上記の研究の発展を切望して大きな期待をもちつつも、今、悩み苦しんでいる人々の心の問題、精神疾患への治療的アプローチをどんなかたちであれ要請されている。心理学派は、どの学派であれその点での制約を受けざるを得ず、生物学派が真理に到達するまで傍観することを許されている訳ではない。

いずれにしろ、人間を研究対象とする学問は、「人間は何処から来て、何処へ行くのか？我々は何ものなのか？」という最終的な問いの解答を出そうとしていることは共通している。

1. 「人間は何処から来て、何処へ行くのか？そして、我々は何ものなのか？」

一言で言えば、人間の真理の探求は、上記の課題の解明に尽きる。

「人間は何処から来て、何処へ行くのか？」の課題解明は、宇宙形成の解明、太陽系の誕生、地球での生命の誕生、生物界での人類の発展進化、人間の精神（こころ）の発生、発達などの過程がどのようであるのかの謎を解明する営為が科学的学問の目的である。これらは、天文学、物理学、生物学、心理学などの諸学問の最終的な課題である。

「我々は何ものか？」は、最初は、人間を創造した自然の力、あるいは宇宙世界との関係を、哲学というかたちで考えることから始まった。ギリシャ哲学は、宇宙や自然を創造した力があると思弁し、「神」の概念をつくった。その「神」によって、宇宙も人間も創られたとした。それが「宗教」と結びつき神学体系をつくった。

しかし、近世の自然科学の発展は、そうした観念論でなく、事実（真理）の発見による唯物論的視点によって事実上なされている。

いずれにしろ、「我々は何ものか？」という課題は、その後、心理学の課題となり、「汝、自身を知れ」という自己の存在を客観的に理解し、定位させるという道に進むようになっている。そう考えると、精神分析は、「自己理解」「自己分析」を必須とし、それを基礎としてうちたてられるべ

き学問とならざるを得ないのは、フロイトの主観や思惑を超えて必然的なものであったと言うべきであろう。

2. 精神分析の「基本思想」

先に、人間にとって、古い過去からの課題である「汝、自身を知れ」は、人間は、自分を創造した自然界の法則を解明することにより、自分をつくったものの正体を理解するという精神(こころ)という、最高水準のもの、自然界の物質運動の最高水準の高次神経活動(パブロフ)を行う中枢神経系(脳)の働き、それ自身を知れということになるのである。

生物学方法でやったのがパブロフとすれば、心理学的方法でやったのがフロイトである。

その結果、フロイトの基本思想は、「汝、自身を知れ」、つまり、自己分析という心理学的方法を通じて、精神の解明を行い、次の思想に到達したと考えられるのである。

すなわち、

- ① 精神の働きには、二面性(矛盾する欲動)がある。

それは、生と死、愛と憎の矛盾であり、前者は、「生の欲動と死の欲動」、後者は、「エディプスコンプレクス論」として了解し説明したのである。

とくに、エディプスコンプレクス論は、自分(子ども)を創造したもの(両親)を理解し、その両親と心理的關係で生じるものを発見することが、自分(子ども)にとって、「汝、自身を知る」方法のひとつであったからである。

ただ、フロイトのエディプスコンプレクス論は、西洋文化、一神教の影響を受けていた。したがって、東洋文化で多神教の影響を受けた古澤平作の阿闍世コンプレクス論をフロイト自身もすぐに理解できなかったのである。

- ② 精神分析は、もともと、人間の精神が形成してきた文化・文明、民族・国家、政治・経済の活動を理解しようとする集団心理学(社会心理学)の視点から、人間のこころ

の働きを解明しようとした。その考えを、個人心理学へ応用したという点である。集団心理と個人心理とは同じ機制が見られるという思想である。精神分析家と称する人にも、その事実は無頓着である点がみられることは注意を喚起する必要がある。

以上を、「はじめに」述べた、「フロイトの思想のエッセンス」に、つけ加え、補強しておくことが、重要と思われる。

V. おわりに

精神分析は「冬の時代」に入り、「やがて衰退する」とさえ極言する人がいるが、事象の真理は、最終的にひとつであると仮定すれば、人間の精神(こころ)の構造と機能の解明によってそれが達成されるのだが、そこに到達するまでは、さまざまな試行錯誤の過程で毀誉褒貶(きよほうへん)を受ける運命は避けられない。真の科学的態度をもつ者にとっては、それに一喜一憂する必要はない。

誠実な臨床的営みの中で、真理を探求し、検証し、あるものは捨て、あるものを導入しながら、柔軟にして謙虚に事実に向き合う姿勢を維持する限り、精神分析はやがて「冬の時代」を脱するであろう。そのことを、私たちは、人に信じろとも信じるなとも言うべきではない。それが真の中立的態度と肝に銘ずるべきであろう。

〈文 献〉

- ・ Eysenk, H.J. (1985) : The decline and fall of the freudian empire, Viking Press. (『精神分析に別れを告げよう』, 宮内・中野・藤山・小澤・中込・金生・海老沢・岩波; 訳. 批評社, 1988)
- ・ Jaspers, K (1913) : Allgemeines Psychopathologie. Verlag von Julius Springer, Berlin, 1913. (『精神病理学総論』, 内村・西丸・島崎・岡田; 訳. 岩波書店, 1958)
- ・ 小此木啓吾 (2002) : フロイト思想のキーワード. 講談社現代新書
- ・ Wells, H.K. (1956, 1960) : Pavlov and Freud

I (1956), II (1960), International Publishers.
Co, Inc. (『バプロフとフロイト』, 中田・堀内 ;
訳. 黎明書房, 1966)

注) 本稿は, 北海道精神分析研究会の精神分析セ
ミナー・シリーズで〈特別講義〉(2015年12月
20日)として論じたものを要約したものである。